

## フェリ・フォン・ケレケスとは何者なのか。

経営システム工学科 1 年 渡邊さゆり

対象作品「チャールダーシュの女王」2002 年メルビッシュ音楽祭版

演出：ヘムルート・ローナー/ 指揮：ルードルフ・ビーブル

初演：1915 年 11 月 17 日、ヨハンシュトラウス劇場(ウィーン)

私は今回、「チャールダーシュの女王」の中でのフェリ・フォン・ケレケスの存在について考えてみようと思う。

登場人物の紹介によると、フェリは、通称フェリ・バーチと呼ばれているハンガリーの貴族で大佐であるようだ。しかし、このオペレッタを見ている最中に 1 つの疑問点が浮かび上がってくる。それは、第一幕第一場の、時間を戻して、死人が蘇って行くようなシーンの前のシーンで、時間を戻す前であるにも関わらず、フェリのみ（正確にはフェリとバイオリン奏者）が登場し、シルヴァの魅力について、シルヴァやエドウィンやボニと過ごした日々をまるで昔話のように話し始める。これがフェリだけでなく、エドウィンやシルヴァ、ボニがいて一緒に昔話をしているなら良いが、フェリが一人だけにいるというのはおかしいと思う。ましてやフェリは、このオペレッタに出てくる登場人物の中でもかなり年を取っている方なのに、なぜ一人でのいるのだろうか。

私はこの疑問点について、2 通りの答えを考えた。1 つ目は、素直にフェリ以外の皆が何かしらの原因によって死んでしまったと考えることである。このオペレッタの時代を考えると、ちょうど 1914 年にオーストラリア=ハンガリー二重帝国の皇位継承者であるフェルディナンド大公夫妻が暗殺されたサラエボ事件のよって、第一次世界大戦が勃発した頃ではないかと考えられる。この時代であるとする、第一次世界大戦が原因となって皆が死んでしまったとも考えられる。ここでなぜフェリが死ななかったのだろうかと考えてみると、フェリはだいぶ年を取っているのでこの戦争には従軍せずに済み、その結果として生き残ったのではないだろうか。

2 つ目は、フェリが実は妖精の様な人間ではないものであり、人になりすましていると考えられることである。この様に考えるとつじつまが合うことが多い。たとえば、フェリは貴族であり大佐であるのに、第三幕にあるように、ブダペストのオルフェウム劇場の歌手達の客演の手伝いなどを行っているが、いくら皆の父親的存在であるからと言って、このようなこと出来るのだろうか。もしフェリが妖精の様なものであるとするならば、貴族などの肩書は、名前だけのもの

であり、いわば掟破りのような役割を果たすことも出来るであろう。更にフェリは、ヴァイラースハイム侯爵と同じくらいの年齢であると考えられるが、エドウィンやボニといった若者と踊ったりしているのは、いくら遊ぶことが好きな大人であると言っても、常軌を逸している。本来ならば、ヴァイラースハイム侯爵のように、一族の代表という立場にいてもおかしくない年齢だと思う。そのような年齢でありながら若者に混ざって遊んでいては普通、一族に貢献するどころか、悪い噂などを流されて悪影響を与えてしまうのではないだろうか。（ここで、フェリが自分の家族や一族の話などを全くしていないというところも、気になってくる。）

また、フェリは何かといいタイミングでい合わせていることが多い。先にも挙げた第三幕でも、シルヴァとボニがエドウィンの婚約発表会場からやって来たホテルにタイミングよく居合わせている。この場面はシルヴァがエドウィンとの婚約の契約書を自ら破り捨てた後という、今後の展開に関わるとても重要な場面である。他にも第三幕でレーオポルト・マーリア侯爵にアンヒルテが昔ミスコルツ劇場で活躍する美人の歌姫であったなどという重要な秘密をうっかり話してしまうなど（もしフェリが妖精の様なものであると考えるならば、この行動は「うっかり」ではなく、計画的な行動であると考えられる。）、フェリが居合わせている場面は重要な場面が多い。フェリはエドウィンとシルヴァの恋を实らせる為にやって来たように思えてならない。よって、フェリが妖精の様なものではないかと考えた。普通のオペラでは、この様なファンタスティックな意味で非現実的なことは考えにくいだが、オペレッタならば、あり得るのではないかと私は考えた。